

全電源喪失の記憶

証言 福島第1原発

■第4章「東電の敗北」

福島第1原発の北西約50キロ、福島

県川俣町にある「おじまる」と交

流館「は住民の避難所となっていた。

廃校となった小学校を改修して、4

月から営業する予定だった宿泊施設

だ。3月14日午後10時ごろ、双葉町

から避難した天野正篤(73)は室内の

人々の様子がおかしいことに気づい

た。

この部屋には天野と同じ集落の住

民が何人も避難していた。夜も遅い

というのに皆、そわそわして落ち着

かない。小声で「ご大丈夫なの

か」「もっと遠くの知合いのどこ

ろに行く」と言っているのが聞こえ

12

避難住民への電話



福島第1原発事故による避難で人がいなくなった
双葉町の中心部＝2月23日

もっと遠くへ逃げて

だ。

そのうち荷物をまとめて部屋を出

て行く人が始めた。昼間は足の踏

み場もなかったのに、部屋のあちこ

ちに空きスペースができていた。

住民たちは廊下に設置されたデシ

ビで3号機の爆発を知った。天野が

かつて勤めていた建設会社は1、3

号機の基礎工事に関わっていた「原

発の爆発なんて考えたこともなか

たし、爆発の映像を見ても信じられ

なかった。

天野は集落から一緒に避難してき

た女性から声をかけられた。女性は

まだどこかで東電を信じてもいた。

険しい表情で携帯電話を握りしめて

いた。

「娘が『お母さん、そこから逃げ

て』と言ってるんだけど…」

長伊沢郁夫(52)もその一人だ。

「郁夫ちゃん、あんちゃんまで

ない。素直な子だった。近所の

みんなは『郁夫ちゃん、郁夫ちゃん』

ってかわいがってたな」

その伊沢はまさにこの瞬間、制御

室において、2号機格納容器の破損を

防ごうと、死に物狂いで対応に当

っていた。

事故から3年、天野は郡山市の仮

設住宅で暮らす。「政府も東電本店

もわちゃくちゃ指差を出していた

のに、現場の人たちは自分たちの住

として、東電と共に日本の経済成長

を支えてきたという自信があった。

懸命やってくれた。事故はあったけ

ど恨みはない。郁夫ちゃんには感謝

しているよ」(敬称略。年齢、肩書

は当時。共同通信 篠原雄也)

連企業に勤める住民は多かった。第